

令和 3 年 5 月 1 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04528

研究課題名(和文)エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証：アラビア文字資料の収集・分析を通してー

研究課題名(英文)Historiographical Study of Islamization in Ethiopia: Based on Research and Analysis of Arabic Manuscripts

研究代表者

石原 美奈子 (ISHIHARA, MINAKO)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20329741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アフリカ北東部でキリスト教徒が多数派を占める国であるエチオピアにおいて、イスラームがどのように浸透・普及したのかについて、とくに19世紀以降のエチオピア南西部のクシ系民族オロモ社会でイスラームの普及に貢献した人々の人生史や彼らの著作を収集することを通して、明らかにすることを目的とした。人生史の収集は、現地に赴いて、人々に口頭でインタビューを実施するほか、ムスリム知識人たちが書き残した手書きのアラビア文字資料を重要な一次資料と捉えて、デジタル・カメラで撮影し、デジタル・データとして保存する作業に取り組んだ。将来的には、アラビア文字手書き資料のデータベースを構築する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、キリスト教国として知られるエチオピアにおけるイスラームの歴史の一断面を実証的データをもとに明らかにした。19世紀以降のエチオピア南西部のオロモのイスラーム化の過程を、ムスリム宗教指導者の個人史を紡ぎ合わせ、アラビア文字資料から読み解くという手法は、文化人類学と歴史学の手法を融合したものであり、「イスラーム化」研究の手法を開拓したという点で学術的意義は大きい。エチオピアの歴史は、一つの民族や地域を単位として研究されることが多いが、「イスラーム化」は、民族・地域・国の境界を越えて人々を繋ぐ現象であり、新たな歴史観を提示する点において社会的意義が大きい。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to investigate how the Cushitic Oromo people living in southwestern Ethiopia accepted Islam, by focusing on the lives and contributions of Muslim religious leaders. Life histories of prominent Muslim religious leaders were told and retold among those who venerate them, and interviews were conducted among these followers and those closely related to the religious leaders. Research on written manuscripts and hand-written documents, kept shelved in individual libraries, was also conducted, and these manuscripts, regarded as first-hand historical material, were digitalized by taking photographs. Creating a database of these digitalized images and conducting a further analysis of the contents will be a future task to be undertaken.

研究分野：文化人類学

キーワード：エチオピア オロモ イスラーム化 スーフィズム アラビア文字資料 歴史構築

1. 研究開始当初の背景

エチオピアはキリスト教国として知られていたこともあり、イスラーム及びムスリム諸民族の研究は後発的な分野であった。エチオピアのイスラームに関する最初の研究はアフリカの比較イスラーム史研究の大家トリミングム著『エチオピアのイスラーム』(Trimingham 1952)である。その後、エチオピア人歴史学者 Hussein Ahmad やイスラエル人歴史学者 Haggai Erlich、最近はノルウェー人 Terje Østebø などによって、エチオピア国内のイスラームの動向や周辺イスラーム諸国との交流史に関する研究が進んだ。

研究代表者(石原美奈子)は、1990年にエチオピア南部のムスリム・オロモ社会で文化人類学的調査をはじめ、クシ系民族オロモがイスラームを受容する過程について、おもにその導入・教育に貢献したムスリム宗教指導者たちの功績に着目しながら調査研究を進めてきた。そして博士論文では、エチオピア南西部のオロモ社会で聖者としても広く信奉を集めてきた西アフリカ出身のティジャーニー指導者アルファキー・アフマド・ウマル(1953年没)の功績について取り上げた(石原 2009)。ティジャーニー教団は、もともとモロッコで誕生したスーフィー(イスラーム神秘主義)教団であり、マグレブや西アフリカを中心にネットワーク状に支持者を広げている。その一派がエチオピアに導入され、オロモの人々に受け入れられる過程で土着化し、今日エチオピア南西部のみならず全国的に最も活発なスーフィー教団となっている。

代表者は、エチオピア南西部のイスラーム化に貢献したムスリム宗教指導者たちの人生や歴史的役割について聞き取り調査を実施する過程で、人々がアラビア文字で記したアラビア語・オロモ語による手記を参照する場面にたびたび出くわし、アルファキー・アフマド・ウマルの人生誌を執筆する際にも彼の弟子であり信奉者でもあるムスリム有識者たちが著した手稿本を参照した(Ishihara 1998、石原 2009)。ただ、これまで代表者は、文字資料そのものよりも、そこに書かれてある内容を重視するあまり、文字資料そのものの資料的価値を見落としてきた。今日エチオピア南西部には聖者として崇敬されその墓廟が参詣地となっているムスリム宗教指導者が数多くいる。その多くは、エチオピア国内外での教育や修行の経歴をもち、郷里で教育や社会奉仕に従事しながら著作を残している。彼らがどのような蔵書をもち、どのような教本を用いながら教育に従事し、そしてどのような著作(聖者伝・預言者讃歌・教導書)を残したのかについて調査研究することは、「イスラーム化」の過程を探る上では必要不可欠な作業であることに気づいたのである。

エチオピア南西部の調査を通してこうした「気づき」に辿りついた時、同じような問題関心からアラビア文字資料の史料化(収集・分析)を開始している研究者たちと交流機会を得た。コペンハーゲン大学のアレッサンドロ・ゴリ教授とその研究チームである。北東アフリカ地域全般を視野に置いた彼らの活動は、おもにアラビア文字による手稿本の収集・分析である。彼らは文字資料を保有するムスリム宗教指導者を探し出して手稿本に限りその撮影を行うという場当たり的かつ選択的な方法をとって、読解・分析作業を後回しにしているだけでなく、それぞれのムスリム宗教指導者が生きていた社会・時代背景について十分な知識をもたずに収集活動を行っていた。

2. 研究の目的

本研究は、エチオピア南西部におけるイスラーム化の過程を文字資料の収集・分析を通して明らかにすることを目的とした。当該地域でイスラーム教育・普及に貢献した著名なムスリム宗教指導者の弟子や信奉者・子孫を訪れ、保管しているアラビア文字等で著した文字資料をデジタルカメラで撮影し、デジタル・データとして保存するとともに、それらを読解し分析する。

3. 研究の方法

(1)代表者および分担者(吉田早悠里)は、エチオピア南西部ムスリム・オロモ社会のティジャーニー教団のネットワークを辿り、アラビア文字資料を執筆、ないし個人で保有している人々を突き止め、執筆ないし保有する人物の人生史を聞き取るとともに、文字資料をデジタルカメラで撮影し、デジタル・データ化する作業に取り組んだ。

(2)代表者が1992年以来実施してきたエチオピア南西部でのイスラーム化に関する人類学的調査の過程で撮影したポジ・ネガフィルムの画像をデジタル化した。また、1992年以來の調査で行ったインタビューの音声データ(カセットテープ録音)も一部デジタル化した。

4. 研究成果

アラビア文字資料、画像、音声データをデジタル化することによって、今後の研究を進展させていく資料基盤を構築することができた。コロナ禍で最終年度は現地渡航できなかったこともあり、アラビア文字資料のデジタル史料化についてはまだ完遂できておらず、読解・分析についても今後の課題と考えている。

ただ、デジタル化によって、著書『愛と共生のイスラーム 現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拜』(春風社、2021年刊)を完成させることができた。これは、代表者の博士論文

(2009年東京大学提出)に大幅に加筆修正を施しながら、第 部には、近年の社会環境の変容についての二章(第9章松波康男著、第10章吉田早悠里著)を加えたものである。

第 部(西部オロモ社会とイスラーム)では、オロモ民族主義の立場をとるオロモ人歴史学者たちが提示するオロモの歴史を脱構築した。オロモの人々の歴史は、エチオピア南東部から四方へ拡散・移動した歴史として描かれてきたが、今日オロモを自称する人々の系譜を遡ると、オロモではない名前が登場する。これは、16世紀後半以降のオロモの拡散移動の過程で、「オロモ化」された異民族が多数存在していることを意味している。南西部のジンマ地方と西部のウォッレガ地方を対比させながら、それぞれの地域に定着したオロモの人々がどのような社会・政治体系を形成し、それらが19世紀末にどのようにエチオピア帝国に組み込まれたのかについて取り上げている。

第 部(カリスマの誕生:アルファキー・アフマド・ウマルの人生誌)では、西アフリカ出身のアフマド・ウマルがどのような経緯でエチオピアにやってきて、エチオピア西部の人々がどのように受入れたのかについて、アラビア文字資料と口頭でのインタビューに基づいて再構築を試みている。

第 部(カリスマの日常化:ティジャーニー教団の「土着化」)では、アルファキー・アフマド・ウマルの死後、そのカリスマ性に依存してきた西部オロモの人々が、カリスマ性の存続を願ってどのような慣習・制度を生み出してきたのかについて、人類学的調査をもとに、記述している。そこには、霊媒師、ティジャーニー教団の組織、聖者廟参詣などが登場する。

そして第 部(「カリスマ」を取り巻く社会環境の変容)では、聖者廟村の周辺の土地をめぐる投機行動について松波康男が現地調査に基づいて記述している。そして、分担者吉田早悠里はアルファキー・アフマド・ウマルの息子(存命中の最後の息子)アブドゥルカリームが生きるトリという森の奥深くの村での調査をもとに、アブドゥルカリームが成し遂げようと取り組んでいる「仕事」について記述している。

本書は、西アフリカからエチオピアにやってきてムスリム聖者として崇敬されるようになった宗教指導者の功績と現地の人々との交流を描き出した民族誌であり、イスラームの動向を捉える機軸として「愛と共生のイスラーム」という新しい視点を提示していること、「イスラーム化」の多様な側面について人類学・歴史学を融合した手法を提示していること、など学術的意義が大きい。今後、これを英語に翻訳することで、エチオピア研究、ひいてはアフリカのイスラーム研究に寄与したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Ishihara, Minako	4. 巻 135
2. 論文標題 Contextualising Books Among the Muslim Oromo in Southwestern Ethiopia: Prospects for Future Research	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 AFRICAN RESEARCH AND DOCUMENTATION	6. 最初と最後の頁 117-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石原美奈子	4. 巻 22
2. 論文標題 スーフィー聖者アルファキー・アフマド・ウマルの人生とその時代背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 FIELDPLUS	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉田早悠里	4. 巻 22
2. 論文標題 聖者が暮らす集落で祈る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 FIELDPLUS	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Minako Ishihara	4. 巻 36
2. 論文標題 A Muslim Holywoman in a Christian Empire: Textual Analysis of the Hagiography of Sitti Mumina	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上智アジア学	6. 最初と最後の頁 109-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sayuri Yoshida	4. 巻 36
2. 論文標題 The Government and a Women's Association in a Muslim Holy Village in Southwest Ethiopia	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上智アジア学	6. 最初と最後の頁 149-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishihara, Minako	4. 巻 19
2. 論文標題 Change in the Significance of Affiliation to Tariqa: The Case of Tijaniyya in and around Jimma	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 AETHIOPICA, International Journal of Ethiopian and Eritrean Studies	6. 最初と最後の頁 149-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15460/aethiopica.19.1.1133	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Minako Ishihara
2. 発表標題 Contextualizing Books among the Muslim Oromo in Southwestern Ethiopia
3. 学会等名 The 20th International Conference of Ethiopian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sayuri Yoshida
2. 発表標題 The collection of F.J.Bieber and Kafa society at the beginning of the 20th century
3. 学会等名 The 20th International Conference of Ethiopian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原美奈子
2. 発表標題 「エチオピアのイスラーム-文化と歴史-」
3. 学会等名 アジア経済研究所研究会「アフリカの政治・社会変動とイスラーム」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田早悠里
2. 発表標題 「無文字社会における歴史の再構築と外国人研究者の関与：エチオピア南西部カファ地方の事例から」
3. 学会等名 日本文化人類学会中部人類学談話会242 回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshida, Sayuri
2. 発表標題 Archiving Viennese resources on the history of Ethiopian peoples
3. 学会等名 Workshop on Archives as Cultural Heritage: Cases from Japan, Africa and Europe (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田早悠里
2. 発表標題 20 世紀初頭エチオピア民族誌的資料のアーカイヴス構築
3. 学会等名 日本アフリカ学会第54 回学術大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉田早悠里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東海大学出版部	5. 総ページ数 333(27-57)
3. 書名 生き方としてのフィールドワーク	

1. 著者名 石原美奈子、吉田早悠里他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 550(8-443, 473-495, 497-507)
3. 書名 愛と共生のイスラームー現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拜ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 早悠里 (YOSHIDA SAYURI) (20726773)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------